

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 中国人女子留学生を受け入れた官立三校について  |
| Sub Title        | A study of Chinese women students accepted by three Japanese public universities  |
| Author           | 周, 一川(Zhou, Yichuan)  |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 1997  |
| Jtitle           | 史学 (The historical science). Vol.67, No.1 (1997. 9) ,p.161- 186   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19970900-0161">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19970900-0161</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 中国人女子留学生を受け入れた官立三校について

周 一 川

## 目次

はじめに

- 一、留学生は聴講生として対処された東京女高師
- 二、留学生特設予科を設置した奈良女高師
- 三、留学生特別措置がなかった東京高等蚕糸学校  
おわりに

## はじめに

いまから百年以上前の一八八六年、清国政府は初めて日本に十三名の学生を派遣し、中国人の日本留学が正式に始まった。最初の清国政府の留学生派遣は勿論全員男性が対象であったが、男子留学生の来日につれて家族としての女子留学生も自然にふえてきた。一九〇五年に湖

南省が初めて官費女子留学生を派遣して以来、女子留学生の数は急速に増加したのである。

当時女子留学に関して中国の世論に反対の声が少なくなかったが、他方では既成事実であり、改革の一環でもあるという認識も広がりつつあったため、一九一〇年に清国政府学部は最初にして最後の女子日本留学についての「學部咨留日女生酌定補官費辦法札飭提學司遵照文」を公布した。これには東京女高師（東京女子高等師範学校）、奈良女高師（奈良女子高等師範学校）、蚕業講習所女子部の三校に合格した者に限って官費を補助支給することが明確に規定されていた。<sup>①</sup>

以後、これらの三校は中国人女子留学生を受け入れる主な学校になったが、留学生の教育に対処する方法は一樣ではなかった。そこで本稿では、これらの三校の中国

人留学生教育の特徴を明らかにしてみたい。

なお、東京女高師については加藤直子の<sup>(2)</sup>、奈良女高師については中塚明の<sup>(3)</sup>、それぞれの研究があるので、この二校については留学生教育の特徴的などころを補足するに留め、ここでは蚕業講習所女子部、すなわち農商務省農政局附属東京蚕業講習所、およびそれを前身とする東京高等蚕糸学校の中国人女子留学生のを中心に論述する。

### 一、留学生は聴講生として対処された東京女

#### 高師

東京女高師はその前身である東京女子師範学校が一八七四年に創立され、一九〇八年に改組されて右の名称となった。この学校は日本女性に対する教育機関にとどまらず留学生教育をも行ったため、多くの中国人留学生を受け入れ、かつ送り出した。

留学生の来日が多くなるにつれて、日本政府は一九〇一年十一月に「文部省直轄学校外国人特別入学規程<sup>(4)</sup>」を設け、外国人が官立学校に入学することを認めた。この規程により、外国人留学生受け入れ体制が形としては整った。だが、東京女高師の最初の具体的な対応策は一

九〇九年に「時勢ノ止ム可カラザルモノアルヲ認<sup>(5)</sup>」て制定した「外国人特別入学規程」であった。それは二名の清国留学生の入学申請が契機ではなかったかと思われる。

この「外国人特別入学規程」が制定される以前に入学した最初の外国人留学生はタイ人であった。一九〇三年にタイ国王妃の発意により、男女八名が日本に留学した。そのうちの女子四名を受け入れたのは前述の東京女子師範学校であった。彼女たちが受けた授業は日本人学生とは全く別であり、特別の教育であったと言える。

これに対し、「外国人特別入学規程」には、「外国人ニシテ文部省直轄学校外国人特別入学規程ニ依リ入学ヲ志望スル者アルトキハ設備上差支ナキ場合ニアリテハ文科(理科若クハ技芸科) 聴講生トシテ之ヲ許可スルコトアルベシ<sup>(6)</sup>」とあり、留学生はこれ以後聴講生として受け入れることを決めたのである。その後、楊蔭楡と張佩芬の二名の清国留学生が理科の聴講生として入学した。以来、聴講生としての中国人留学生は日本人に混じって一緒の授業を受け、四年間の学習生活を送ることになった。加藤直子が紹介した東京女子高等師範学校中国人留学生の「学科別入学者数一覧」によると、一九〇九年から

一九三七年までに、一九一二年、一九二六年、一九三三年、一九三四年の四期しか中国人留学生の入学がなかった。つまり、この二名の清国留学生が入学して以来、東京女高師にはほとんど毎年のように中国人留学生が入学することになったことがわかる。一九三七年までに六十二名の中国人留学生が入学したが、そのうち卒業したのは三十九名であり、内訳は理科十七名、文科八名（その中に保育実習を含む）、家事科（技芸科）十一名、図画専科二名、保育実習科一名であった。東京女高師の卒業生には、奈良女高師に比べて理科が多かったのが特徴である。

一九一八年の理科卒業生であった陶慰孫は、卒業後帰国してすぐ北京女子師範で教鞭を取ったが、翌年の一九一九年にアメリカのコロンビア大学に留学し、修士号を取得した。その後、陶慰孫はイギリス、ドイツ、フランスなどの有名な化学研究機関で研修し、帰国して上海大同大学に勤めた。一九二七年に再び来日し、京都帝国大学理学部に入學して、一九三〇年に博士号を取得した。彼女は日本で最初に理学博士となった中国人女性であった。<sup>(7)</sup>

「外国人特別入学規程」は、一九一五年と一九二一年

中国人女子留学生を受け入れた官立三校について

の二回改正されたが、留学生の聴講生としての受け入れ方針は変わらなかった。それは記録から知り得る限り、第二次世界大戦終了の直前まで終始変化しなかった。<sup>(8)</sup>ただし、一九二九年に「聴講生編入規程」が定められ、その第一条に「本校各学科聴講生ニシテ其ノ全課程ヲ履修シ既往各学年ノ成績優良ナル者ハ願ニ依リ第三学年又ハ第四学年ノ始ニ於テ之ヲ本科ニ編入スルコトアルヘシ」、続く第二条に「本校各学科聴講生ニシテ其ノ課程中ノ一科目又ハ数科目ヲ履修シ既往各学年ノ成績優良ナル者ハ願ニ依リ第三学年又ハ第四学年ノ始ニ於テ之ヲ選科生ニ編入スルコトアルヘシ」<sup>(9)</sup>とあるように、何人かの留学生



写真1 陶慰孫 (1928年)

は選科生に編入され、その後、選科生として卒業した。  
ところで、一九九四年夏、筆者が董錫蕙という東京女  
高師の元留学生にインタビューしたとき、次のような新  
しい事実が浮かびあがった。

董錫蕙は一九一九年、山東省済南市に生まれ、齊魯高  
等中学を卒業した。その学校の教師の勧めで庚子賠款  
(義和團事件賠償金) 留日学生選考試験を受けて合格し、  
一九四〇年の秋に来日した。翌年の一九四一年四月に東  
京女高師に入学、数学を専攻した。日中戦争最中の特殊  
時期であったため、一九四四年の秋に修業三年半で卒業  
した。

董錫蕙と同時に入学して卒業した陳舜翹という留学生  
は化学を専攻した。董錫蕙の話によると、卒業のとき、  
留学生担当の細野という教官には、東京女高師の約七十  
年の歴史の中で正式に卒業した留学生はあなたたち二人  
だけだと言われたとのことである。<sup>(10)</sup> 残念ながら董錫蕙は  
卒業証書を文化大革命中に燃やしてしまった。一九四二  
年まで刊行が続いた『東京女子高等師範学校一覽』には  
聴講生としての董錫蕙の名はあり、当時在学していたこ  
とは記録されているが、二人が卒業したことについての  
資料は現時点においてはまだ見出していない。



写真2 陶虞孫—陶慰孫の妹— (1996年5月1日撮影)

董錫蕙によると、二人は三年生になってから授業料が免除され、正式な学生になったという。卒業に際して正式な卒業証書をもらったが、それはそれまでの留学生たちに与えられるものではなかったということである。そうすると、董錫蕙と陳舜翹二人は、一九四三年の前後に「聴講生編入規程」により本科生に編入されたことが考えられる。それとも留学生聴講生制度そのものが変わったことによるのだろうか。

聴講生の身分について、留学生自身はあまり感じなかったようである。筆者は、前述の陶慰孫の妹であり、東京女高師の一九二一年度卒業生である陶虞孫への手紙で当時の聴講生のことを尋ねたが、「私たちは正式な卒業生であった。東京女高師の留学生については、確かに聴講生という呼び方があったが、それは中国語の傍聴生という意味では絶対がない」とのことであった。陶虞孫はそれを説明するため、次のような例を挙げている。

「普通の聴講生には留年がないが、東京女高師の留学生には留年者がいた。授業も日本人本科生と全く同じであった。特別に待遇されたことと言えば、纏足していた二人の中国人留学生の体育科目を免除されたことくらいである」<sup>(11)</sup>。董錫蕙も細野教官に言われるまで自分がどう

いう身分であったということについて明確ではなかったようである。その原因は聴講生である留学生と日本人本科生との学校生活がほとんど同じであったことによると思われる。東京女高師の留学生は課程が四年間であり、日本人本科生と一緒に入学し、全く同じ授業を受けたのである。しかも中国人留学生の入学志願者の合格率は低く、志願者の最も多い一九三〇年度で二十三名中二名、一九三一年度でも十六名中三名しか入学できなかった。いわゆる聴講生とは異なり、入学試験もかなり厳しかったようである。<sup>(12)</sup>

以上からみて、東京女高師の中国人女子学生は聴講生であったが、それは「外国人特別入学規程」に従っての形式的規定であり、就学内容や卒業資格などについては日本人の本科生と実質上の区別がなかったと言える。

#### 一、留学生特設予科を設置した奈良女高師

奈良女高師は一九〇八年に設置され、一九五二年に奈良女子大学に改組されるまでの四十四年間、「女子師範学校、師範学校女子部及高等師範学校ノ教員タルベキ者ヲ養成シ兼ネテ普通教育及幼児保育ノ方法ヲ研究スルヲ以テ目的トス」(校則第一条)という学校であった。文

科、理科、家事科の三学科を置き、三千名余りの卒業生を出したが、そのうち中国人は五十七名であった。

奈良女子大学学生課に提供していただいた名簿および奈良女子大学附属図書館所蔵校史関係史料の「特設予科・外国人特別入学」を基にして作成した中国人留学生名簿を以下に掲げる。

この名簿によると、退学者になっている銭青の記録に誤りがあると思われる。前掲の「特設予科・外国人特別入学」の記録と銭青の話を基にすると、銭青は特設予科の修了者であったことがわかる。さらに「奈良女子大学八十年史」一九八九年、所収の銭青「奈良の憶い出」や『佐保会会員名簿』などの記録、および銭青の話を総合すると、銭青は一九三二年の文科の卒業生でもあったと思われる。そうすれば中国人留学生の卒業生数が五十六名ではなく五十七名になる。

以上の点を踏まえ、たうえで名簿を検討したとき、奈良女高師は一九四九年までに卒業生と退学者とを合わせて九十六名の中国人留学生を受け入れたことがわかる。奈良女高師の特設予科の修了者は九十三名あり、特設予科を修了せず、退学した者も少なくないので、百名以上の中国人留学生が奈良女高師に在学したことは間違いない。

ところで、奈良女高師は昭和期の中国人女子留学生を受け入れた中心校として注目されているが、実は中国人女子留学生の来校は明治末期から始まっていたのである。一九一〇年四月、五名の清国政府留学生が聴講生として入学した。彼女たちは全員東京からやってきた。そのうちの一名の出身校は実践女学校であったが、他の四名の出身校は青山女学校であった。三名が数物化学部で、二名が博物家事部で勉強したが、辛亥革命が起こったため、全員が退学して帰国した<sup>(14)</sup>。その後の十数年間は奈良女高師に中国人留学生の姿は現れなかった。

一九二四年、中国人留学生が再び奈良女高師に入学した。文部省普通学務局の「官公立大学専門学校支那留學生現狀調」(一九二四年五月)によれば、一九二四年に入学した二名は十九歳の于鳳雲と十八歳の王秀英であり、文科と理科の専攻の違いはあるものの、二人とも旧奉天省の出身で、かつ私費留学生であったとされている。この記録は奈良女高師の中国人留学生の名簿の記載と一致しないが、それは奈良女高師特設予科を設置する前の留學生の記録が残っていないためであろう。

その二名の留學生の入学が契機になったと思われるが、一九二五年四月に奈良女高師は中国人留學生のために特

〔表二〕 奈良女子高等師範学校中国人留学生名簿（一九二九年—一九四九年）

| 氏名   | 出身地  | 出身学校          | 生年月日       | 入学年月日     | 専攻学科 | 卒業・退学年月日     | 備考   |
|------|------|---------------|------------|-----------|------|--------------|------|
| 王秀英  | 関東州  | 旅順師範学堂        | 一九〇六、三、二   | 一九二五、四、一〇 | 理科   | 一九二九、三、二四 卒業 | ※    |
| 于式玉  | 山東省  | 山東省立第一女子師範学校  | 一九〇六、九、三   | 一九二六、四、一〇 | 文科   | 一九三〇、三、二四    | ※    |
| 霍淑英  | 湖北省  | 湖北省立女子師範学校    | 一九〇四、一〇、三  | 〃         | 〃    | 〃            | ※    |
| 程国敷  | 浙江省  | 浙江省立女子中學師範部   | 一九〇七、二、二五  | 一九二七、四、一〇 | 〃    | 一九三二、三、二四    | ※    |
| 楊慕蘭  | 浙江省  | 浙江省立第一女子師範学校  | 一九〇五、一、七   | 〃         | 理科   | 一九三一、三、二四    | ※    |
| 陳積   | 浙江省  | 浙江省女子師範学校     | 一九〇八、一〇、二六 | 〃         | 〃    | 〃            | ※    |
| 葉雅棣  | 浙江省  | 〃             | 一九〇七、六、一   | 一九二八、四、一〇 | 〃    | 〃            | ※    |
| 莊氏無嫌 | 台湾   | 台南州立台南第二高等女学校 | 一九〇九、一〇、六  | 〃         | 家事科  | 〃            | 〃    |
| 張志奇  | 安徽省  | 奉天高等女学校       | 一九二一、一、二五  | 一九二九、四、一〇 | 文科   | 一九三三、三、二四    | 〃    |
| 龔均遂  | 江西省  | 江西省立女子職業学校    | 一九〇〇、四、二四  | 〃         | 理科   | 一九二四、三、二四    | ※    |
| 易希道  | 湖南省  | 湖南省立第一女子師範学校  | 一九二一、四、一五  | 一九三〇、四、一〇 | 理科   | 〃            | 〃    |
| 梁毅之  | 広西省  | 広西省北流県立中学校    | 一九〇九、八、一   | 一九二八、四、一〇 | 家事科  | 〃            | 予科退学 |
| 果富美  | 黒龍江省 | 黒龍江省立第一女子師範学校 | 入学時三歳      | 〃         | 文科   | 〃            | 〃    |
| 華哲   | 湖南省  | 京西法制附設中学校     | 一九二一、一〇、二〇 | 一九三〇、四、一〇 | 文科   | 一九二五、三、二四    | 〃    |
| 張盛華  | 湖南省  | 湖南省周南女子中学校    | 一九〇八、一、二二  | 一九三一、四、一〇 | 〃    | 一九二六、三、二四    | 〃    |
| 高璟   | 江蘇省  | 江蘇省立松江女子師範学校  | 一九〇〇、一、七   | 〃         | 〃    | 〃            | 〃    |
| 楊得琳  | 湖南省  | 湖南省立高級中学校     | 一九〇九、二、二〇  | 〃         | 理科   | 〃            | 〃    |
| 于飛瀾  | 浙江省  | 上海泉漳高級中学校     | 一九二〇、五、二六  | 一九三三、四、一〇 | 家事科  | 〃            | 〃    |
| 鄧傳璧  | 江西省  | 江西省立第三女子中学校   | 一九一五、七、一六  | 一九三一、四、一〇 | 〃    | 〃            | 〃    |
| 李恕   | 江西省  | 江西省立女子中学校     | 一九〇八、二、一七  | 〃         | 〃    | 〃            | 〃    |
| 謝光珍  | 江西省  | 江西省立南昌中学校     | 一九〇九、二、二三  | 〃         | 文科   | 一九二六、三、二四    | 〃    |
| 于軼凡  | 浙江省  | 浙江省立高級中学校     | 一九二一、六、六   | 一九三三、四、一〇 | 理科   | 一九二七、三、二四    | 〃    |
| 張京先  | 湖北省  | 天津私立中西中学校中退   | 一九二六、四、二七  | 一九二四、四、一〇 | 文科   | 一九二八、三、二四    | 〃    |

中国人女子留学生を受け入れた官立三校について



|       |       |                |          |           |     |           |    |   |
|-------|-------|----------------|----------|-----------|-----|-----------|----|---|
| 許氏 春菊 | 台湾    | 台南州立台南第二高等女学校  | 一九八、三、一八 | 一九三四、四、二〇 | 家事科 | 一九三八、三、二四 | 卒業 | ※ |
| 郭 迨 瀾 | 閩東州   | 旅順高等公学校        | 一九四、五、二八 | 一九三五、四、二〇 | 理科  | 一九三九、三、二四 | ※  | ※ |
| 閔 秀 蓮 | 吉林省*  | 吉林省立女子師範学校     | 一九七、五、六  | 一九三六、四、二〇 | 理科  | 一九四〇、三、二〇 | ※  | ※ |
| 常 淑 慧 | 奉天省*  | 東京昭和高等女学校      | 一九六、二、二七 | 一九三五、四、二〇 | 家事科 | ※         | ※  | ※ |
| 錢 垂 慎 | 浙江省   | 北京孔德学校         | 一九六、三、九  | 一九三七、四、二〇 | 理科  | 一九四一、三、二〇 | ※  | ※ |
| 戴 玉 僊 | 奉天省*  | 哈爾濱市立女子第二高級中学校 | 一九九、六、四  | 一九三八、四、二〇 | 理科  | 一九四一、二、二四 | ※  | ※ |
| 高 淑 芬 | 龍江省*  | 新京特別市立女子中学校    | 一九〇、九、二六 | 一九三九、四、八  | 文科  | 一九四二、九、三〇 | ※  | ※ |
| 田 琳   | 龍江省*  | 龍江省立齐齐哈尔女子師範学校 | 一九九、九、五  | 一九三八、四、二〇 | 理科  | ※         | ※  | ※ |
| 趙 貴 文 | 吉林省*  | 新京特別市立女子中学校    | 一九一、六、七  | 一九三九、四、八  | 理科  | ※         | ※  | ※ |
| 賈 維 一 | 奉天省*  | 北平大同中学校        | 一九八、二、三  | 一九三八、四、二〇 | 理科  | ※         | ※  | ※ |
| 陶 德 滋 | 奉天省*  | 新馮長岡女子師範学校     | 一九八、二、五  | 一九三九、五、八  | 家事科 | ※         | ※  | ※ |
| 王 孝 華 | 龍江省*  | 龍江省立齐齐哈尔女子師範学校 | 一九三、六、二九 | 一九四〇、四、二〇 | 文科  | 一九四三、九、三〇 | ※  | ※ |
| 初 慶 芝 | 吉林省*  | 新京特別市立女子中学校    | 一九〇、五、二  | 一九三九、四、二〇 | 理科  | ※         | ※  | ※ |
| 蕭 慕 清 | 奉天省*  | 新京留學生予備校       | 一九〇、二、一  | 一九四〇、四、二〇 | 理科  | ※         | ※  | ※ |
| 周氏 蓮姿 | 台湾    | 台中州立台中高等女学校    | 一九三、六、二六 | ※         | 理科  | ※         | ※  | ※ |
| 高 尚 樸 | 奉天省*  | 奉天省立女子師範学校     | 一九〇、二、二七 | ※         | 家政科 | ※         | ※  | ※ |
| 胡 書 雲 | 奉天省*  | ※              | 一九〇、六、一六 | ※         | 家政科 | ※         | ※  | ※ |
| 常 宗 琳 | 奉天省*  | ※              | 一九一、〇、三  | ※         | 理科  | ※         | ※  | ※ |
| 郭 以 明 | 奉天省*  | ※              | 一九二、〇、一六 | 一九四一、四、二〇 | 文科  | 一九四四、九、三〇 | ※  | ※ |
| 金 毓 華 | 奉天省*  | 新京留學生予備校       | 一九〇、〇、九  | ※         | 理科  | ※         | ※  | ※ |
| 張 淑 蘭 | 奉天省*  | ※              | 一九〇、二、二〇 | ※         | 理科  | ※         | ※  | ※ |
| 胡 鳳 雲 | 牡丹江省* | 哈爾濱高等女学校       | 一九三、五、四  | ※         | 理科  | ※         | ※  | ※ |
| 金 蕊 珠 | 江蘇省   | 江蘇省立蘇州女子師範学校   | 一九〇、九、一  | ※         | 理科  | ※         | ※  | ※ |
| 張 秀 英 | 錦州省*  | 奉天省立奉天女子師範学校   | 一九八、三、八  | ※         | 理科  | ※         | ※  | ※ |
| 李 蔭 情 | 奉天省*  | 新京留學生予備校       | 一九二、九、二九 | ※         | 家政科 | ※         | ※  | ※ |

|     |      |                |            |           |       |           |    |   |
|-----|------|----------------|------------|-----------|-------|-----------|----|---|
| 高素威 | 河北省  | 大連昭和高等女学校      | 一九四、二、二    | 一九四三、四、一〇 | 文科    | 一九四五、九、三〇 | 卒業 | ※ |
| 李蔭廉 | 奉天省* | “滿洲国”立留學生予備校   | 一九三、九、九    | 〃         | 家政科   | 〃         | 〃  | ※ |
| 賈日瑣 | 江蘇省  | 北京師範大學附屬女子中學校  | 一九四、二、三    | 一九四四、四、一〇 | 文科    | 一九四七、三、一五 | 〃  | ※ |
| 王蘭香 | 閩東州  | 旅順高等公學校        | 一九三、九、四    | 〃         | 理科    | 一九四八、三、一五 | 〃  | ※ |
| 孫荃英 | 河北省  | 北京市立師範學校       | 一九二、二、一九   | 〃         | 家政科   | 〃         | 〃  | ※ |
| 果素英 | 河北省  | 北京市立第一女子中學校    | 一九四、六、一五   | 〃         | 理科    | 一九四九、三、一五 | 〃  | ※ |
| 江國馨 | 湖北省  | 漢口市立第一女子高等學校   | 一九五、三、二四   | 一九四五、七、二一 | 數物化學部 | 一九二、九、二四  | 退學 | ※ |
| 李毅如 | 雲南省  | 私立日本青山女學院      | 一九三、二、七    | 一九二〇、四、二六 | 數物化學部 | 一九三、一、二三  | 〃  | 〃 |
| 李巽如 | 〃    | 私立日本實踐女學校      | 一九〇、五、三    | 〃         | 數物化學部 | 〃         | 〃  | 〃 |
| 黃鈞  | 江西省  | 私立日本青山女學院      | 一八九九、七、六   | 〃         | 數物化學部 | 〃         | 〃  | 〃 |
| 朱微  | 江蘇省  | 〃              | 一八九、       | 一九二〇、四、二三 | 〃     | 〃         | 〃  | 〃 |
| 王梅僊 | 〃    | 〃              | 一八九三、一〇、一七 | 一九二〇、四、二六 | 博物家事部 | 一九三、七、一八  | 〃  | 〃 |
| 劉漢琛 | 安徽省  | 安徽省立第一女子師範學校   | 入学時二〇歲     | 一九七、四、二〇  | 文科    | 一九三〇、一〇、二 | 〃  | ※ |
| 姜國琴 | 山東省  | 山東省立第一女子師範學校   | 一九三〇、四、二〇  | 一九三〇、四、二〇 | 家事科   | 一九三、四、三〇  | 〃  | 〃 |
| 沈毓芬 | 四川省  | 四川省立第二女子師範學校   | 一九三、二、二九   | 〃         | 文科    | 一九三、五、三   | 〃  | 〃 |
| 雷蓮芳 | 雲南省  | 雲南省立女子高級中學校    | 一九一、九、二    | 一九三、四、一〇  | 理科    | 一九三、九、一五  | 〃  | 〃 |
| 李莉  | 〃    | 浙江省抗暴弘道女子中學校   | 一九四、一、二五   | 一九三、四、一〇  | 理科    | 一九三、二、一   | 〃  | 〃 |
| 張佩芬 | 江西省  | 江西省立第一女子中學校    | 一九〇八、八、四   | 一九三〇、四、一〇 | 理科    | 一九三、三、三   | 〃  | 〃 |
| 馬淑琴 | 奉天省  | 奉天省立女子師範學校     | 入学時二四歲     | 一九四、四、一〇  | 文科    | 一九四、一、二三  | 〃  | ※ |
| 錢艾華 | 浙江省  | 浙江省立女子師範學校     | 一九四、七、一五   | 一九三、四、一〇  | 文科    | 一九三、五、五   | 〃  | 〃 |
| 龔智  | 湖南省  | 湖南省長沙周南女子中學校   | 一九三、九、二八   | 〃         | 理科    | 一九三七、四、三〇 | 〃  | 〃 |
| 凌智  | 〃    | 湖南省第一女子高級中學校   | 一九〇、二、一〇   | 一九三三、五、三  | 理科    | 一九三七、五、三  | 〃  | 〃 |
| 黃濬  | 〃    | 湖南省長沙福湘女子高級中學校 | 一九八、八、二六   | 一九三七、四、一〇 | 文科    | 一九三八、四、三  | 〃  | 〃 |
| 李潤萍 | 吉林省* | 北平私立弘達學校       | 一九八、八、二六   | 一九三七、四、一〇 | 文科    | 一九三八、四、三  | 〃  | 〃 |

中国人女子留學生を受け入れた官立三校について

|      |       |                |           |           |     |           |    |      |
|------|-------|----------------|-----------|-----------|-----|-----------|----|------|
| 白淑慧  | 北平市   | 滋賀県私立淡海高等女学校   | 一九〇、三、二五  | 一九八、四、一〇  | 家事科 | 一九三九、三、三  | 退学 | ※聴講生 |
| 夏玉芝  | 山東省   | 関東州高等公学校       | 一九四、三、一八  | 〃         | 文科  | 一九三九、六、二〇 | 〃  |      |
| 王翠娥  | 錦州省*  | 吉林省立吉林女子師範学校   | 一九八、三、五   | 〃         | 〃   | 一九三九、一、二四 | 〃  | ※    |
| 戚恩貴  | 関東州   | 旅順師範学堂         | 一九一、四、二二  | 一九三六、四、一〇 | 家事科 | 一九四〇、二、二六 | 〃  |      |
| 張頰   | 奉天省*  | 奉天省私立坤光女子兩級中学校 | 一九二、二、二六  | 一九三九、四、八  | 文科  | 一九四〇、二、二六 | 〃  |      |
| 毛禮釗  | 江西省   | 江西省南昌市鴻声中学校    | 一九四、一、一七  | 一九三九、四、一〇 | 〃   | 一九四一、四、九  | 〃  |      |
| 徐禮瑛  | 江蘇省   | 上海国華中学校        | 一九六、六、五   | 一九三九、四、一〇 | 〃   | 一九四一、六、九  | 〃  | ※    |
| 陳如玉  | 広東省   | 広東省陽江県立中学校     | 一九四、二、二五  | 〃         | 理科  | 〃         | 〃  | ※    |
| 李德輝  | 四川省   | 北平安徽中学校        | 一九六、一〇、二七 | 〃         | 〃   | 〃         | 〃  | ※    |
| 徐莊   | 江蘇省   | 上海国華中学校        | 一九七、一〇、五  | 〃         | 家事科 | 〃         | 〃  | ※    |
| 程季春  | 奉天省*  | 奉天女子師範学校       | 一九二、三、二七  | 一九四一、四、一〇 | 理科  | 一九四一、六、二  | 〃  | ※    |
| 胡惠芝  | 河北省   | 河北省立通県女子師範学校   | 一九三、八、八   | 一九四二、四、一〇 | 文科  | 一九四三、二、二〇 | 〃  | ※    |
| 劉棣萼  | 奉天省*  | 省立奉天第一女子国民高等学校 | 一九二、一〇、三三 | 一九四〇、四、一〇 | 〃   | 一九四三、六、二六 | 〃  | ※    |
| 博丕齡  | 興安南省* | 新京留学生予備校       | 一九〇、六、三   | 〃         | 理科  | 一九四三、七、二七 | 〃  | ※    |
| 閻樹旻  | 安東省*  | 〃              | 一九三、二、二三  | 一九四一、四、一〇 | 文科  | 一九四四、一、一〇 | 〃  | ※    |
| 郭存愛  | 北安省*  | 哈爾濱女子国民高等学校    | 一九〇、九、九   | 一九四二、四、一〇 | 〃   | 一九四四、三、三  | 〃  | ※    |
| 頼氏雪紅 | 台湾    | 台中州立台中中等女学校    | 一九三、二、二五  | 一九四二、四、一〇 | 家政科 | 一九四四、五、三  | 〃  | ※    |
| 洪深源  | 奉天省*  | 満洲国立留学生予備校     | 一九三、五、二〇  | 一九四二、四、一〇 | 理科  | 一九四五、四、一  | 〃  | ※    |
| 王学栄  | 龍江省*  | 〃              | 一九三、二、二二  | 〃         | 文科  | 一九四六、三、三  | 〃  | ※    |
| 楊秀竹  | 奉天省*  | 新京留学生予備校       | 一九二、二、一   | 〃         | 〃   | 〃         | 〃  | ※    |
| 王菊釵  | 〃     | 〃              | 〃         | 一九四三、四、一〇 | 理科  | 〃         | 〃  | ※    |
| 賈玉芹  | 〃     | 〃              | 〃         | 〃         | 文科  | 〃         | 〃  | ※    |
| 黄滿紅  | 〃     | 〃              | 〃         | 一九四五、四、一〇 | 〃   | 〃         | 〃  | ※    |

出典：奈良女子高等師範学校「中国人留學生の卒業者名簿」、「中国人留學生の退學者名簿」、および奈良女子大学付属図書館所蔵校史関係資料十九「特設予科・外国人特別入学」。なお、※は特設予科の修了者を意味する。出身地は名簿作成当時の呼称をそのまま記し、入学当時「満洲国」に属したものについては\*を付した。なお、表中の「満洲国」の括弧の有無については原表記に従った。

別予科生十五名を募集することを決めて「特別予科生徒募集」と「特別予科設置要項」を公布した。また同年の十月に次のように「特設予科規程」を制定した。

第一條 奈良女子高等師範學校ニ入學セントスル中華民國ノ女子ニ對シ豫備教育ヲ施スガタメ特設豫科ヲ設ク

第二條 修業年限ヲ一箇年トシ其ノ學科目ヲ修身、國語、數學、英語、體操及音樂トス、但シ音樂ハ之ヲ缺クコトヲ得

第三條 毎週教授時數ヲ三十時以内トシ各學科目ノ配當時數ハ凡左ノ如シ

修身一、國語一六、數學六、英語四、體操二、音樂一、

第四條 定員ヲ十五名以内トス

第五條 高等女學校卒業者ト同等以上ノ學力ヲ有シ日本語ヲ話シ得ル者ニ就キ學力並ニ體格ヲ考查シタル上入學ヲ許ス但シ時宜ニ依リ日本語ヲ話シ得ザル者ヲモ入學セシムルコトアルベシ

第六條 入學志願者ハ入學檢定料金五圓ヲ添へ本邦所在自國公館ノ紹介狀ト共ニ左式ノ願書ヲ

差出スベシ

一旦納付シタル檢定料ハ之ヲ還付セズ

(入學願書様式 略)

第七條 特設豫科ヲ修了シタル者ニハ左式ノ修了證書ヲ授與シ本科ニ入學スルコトヲ許ス  
(修了證書様式 略)

第八條 授業料ハ年額五拾圓トシ第一學期第二學期各貳拾圓第三學期拾圓毎學期ノ初ニ納付セシム但シ全ク出席セザル學期間ノ授業料ハ徴收セズ  
一旦納付シタル授業料ハ之ヲ還付セズ

第九條 授業料ノ納付ヲ怠リ督促ヲ受クルモ猶納付セザルモノハ其ノ出校ヲ停止シ又ハ退學ヲ命ズルコトアルベシ

第十條 本規程ニ掲ゲタル事項ノ外ハ凡テ本科生徒ノ例ニ依ル<sup>16)</sup>

中国人女子留学生のほとんど東京に集中していたが、奈良女高師が特設予科を設置してからは、奈良にも留学生がふえてきたのである。そのうちの一人であった錢青の話によると、留学先に奈良女高師を選んだのは、そこに寄宿舎もあったし、中国人留学生のため日本語教育を



写真3 銭青と同じ寄宿舍の日本人学生（銭青は前列の一番左）

行方特設予科があったからだという。<sup>(17)</sup>

銭青は一九〇五年十月十五日に浙江省崇徳県石湾鎮に生まれ、一九二五年八月に浙江省立杭州女子中学を卒業した。校長葉墨君が卒業生たちの進学を勧めたので、銭青、葉雅棣、蔡淑馨、程国敷、陳積、高耐玉の六名の卒業生は日本に留学することを決心した。校長はすぐ彼女たちの留学の件で浙江省教育庁に申請した。当時の教育庁の秘書長は著名な科学家銭学森の父親であり、葉校長の同学でもあったため、留学の正式な手続きは速かに行われた。

彼女たちはみな十六、七歳であった。そのため誰が日本に同伴するかが問題になった。その時、蔡淑馨の婚約者沈端先（すなわち著名な文学者夏衍）が留学先の日本から夏休みで中国にたまたま戻ってきていた。そこで彼は校長に頼まれ、彼女たちを連れて日本に行くことになった。

一九二五年八月十五日、六名は夏衍とともに長崎丸で神戸に到着した。彼女たちはすぐ汽車で奈良へ行き、奈良女高師の特設予科に入学した。夏衍は六名の入学手続きを済ませてから、留学していた福岡の明治専門学校（福岡電気大学）に戻った。

六名が入学した時、特設予科には既に十数名の留学生  
がいた。日本語が上手であった王秀英はそのとき既に本  
科に入学していたとい<sup>(18)</sup>う。

特設予科は留学生のために毎年二度の修学旅行を行い、  
奈良周辺の名所旧跡を見学した。修学旅行先は京都を中  
心として、兵庫県や滋賀県などであった。教官が同行し、  
汽車を利用して、日帰りしたこともあり、場合によって  
は一泊二日のこともあった。旅費は学生の自弁であ<sup>(19)</sup>った。

蔡淑馨と高耐玉は途中で特設予科を退学し、上京して  
医学校と美術学校とにそれぞれ入学した。ほかの四名は  
特設予科を修了し、奈良女高師の本科に入学してから、  
浙江省教育局の官費留学生になった。銭青と程国馥が文  
科に、葉雅棣と陳積が理科に入り、四年後に卒業した。

奈良女高師の中国人留学生の卒業生の総数五十七名の  
内訳は、文科二十二名、理科二十一名、家事科（家政  
科）十四名であり、そのうち特設予科の修了者は四十名  
であった。三十九名の退学者の内訳は、文科十九名、理  
科十名、家事科（家政科）五名、聴講生五名であり、そ  
のうち特設予科の修了者は二十一名であった。つまり九  
十三名の特設予科の修了者のうち六十一名は奈良女高師  
に進学したが、残りの三十二名は奈良女高師に入学しな

中国人女子留学生を受け入れた官立三校について

かったことがわかる。

帰国した奈良女高師の卒業生たちは、教育界に入った  
者が多かった。銭青は、帰国後すぐ浙江省立杭州師範学  
校の教職に就き、日本語と文学を教えた。二年後、華東  
キリスト教大学に転職し、一九四六年に教授になった。  
中華人民共和国成立後、上海同済大学に移って日本語を  
教えた。銭青はまた日本の文学者の著作を訳しながら、  
退職までの五十年余り教職を続けた<sup>(20)</sup>。彼女は現在でも翻  
訳の仕事を続け、社会活動も多く、充実した日々を送っ  
ている。

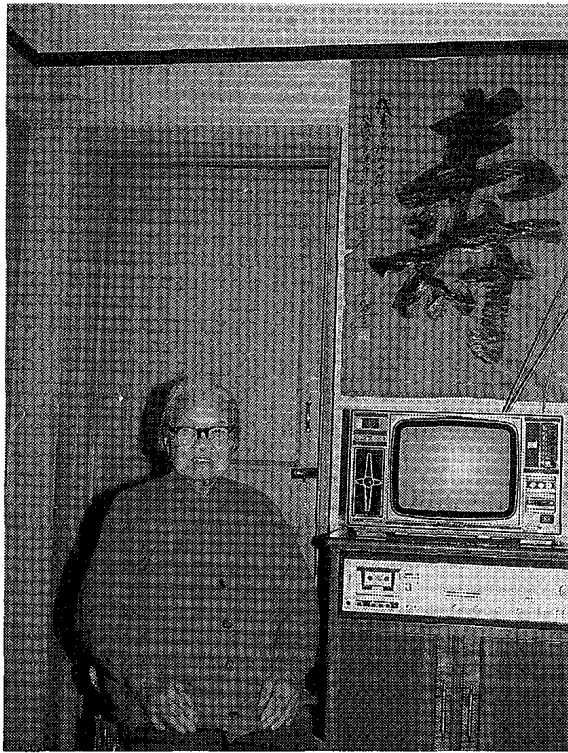


写真4 銭青88歳の記念写真  
(1993年10月15日撮影)

また、銭青と一緒に奈良女高師に留学した五名は、医学を勉強して帰国後杭州の病院に勤めた高耐玉を除いて、他の四名全員は教職についたという。<sup>(21)</sup>

### 三、留学生特別措置がなかつた東京高等蚕糸学校

東京蚕業講習所は一九一三年六月の官制改正により、農商務省から文部省へ移管し、その翌年の一九一四年三月、東京高等蚕糸学校と改称した。一九四四年、さらに東京繊維専門学校と改称し、一九四九年、東京農林専門学校と合併して東京農工大学となった。

女子学生の受け入れたのは早く、東京蚕業講習所時代の一九〇二年からであった。その年、講習所は従来の実験部・伝習部を改め、養蚕部・製糸部の二部制とし、製糸部の中に女生本科と女生別科を設けた。ここに日本で初めての製糸教育制度が確立するとともに、女性に対する製糸教育も同時に始まったのである。『講習規程』によると、講習生の定員は「(一) 養蚕講習科本科男生五十名 養蚕講習科別科男生六十名以内 (二) 製糸講習科本科男生四十名 製糸講習科本科女生二十名 製糸講習科別科女生四十名以内」<sup>(22)</sup>であった。東京農工大学の校

史には、「当時はこうした所に女性の進出は禁断とされていた時代である。この思いきった英断は各方面から好評を博した。そして各地から入学志願者が殺到したとのことである」と述べている。<sup>(23)</sup>

最初の中国人留学生は嵇侃という男性であった。彼は一九〇〇年に蚕業講習所に入り、養蚕講習科別科で勉強した。最初の中国人女子留学生は潘英といい、一九〇五年製糸部女生本科に入り、一九〇七年に卒業した。

東京蚕業講習所は一九〇五年に留学生規程を制定し、「外国人にして本所の講習を受けんとする者にこれを許可する制度を設けた」という。<sup>(24)</sup>その後、一九三八年までに五十九人の中国人留学生がここを卒業し、そのうち女子留学生は十四名であった。

学制二年の製糸女生本科の授業は、講義と実習の二部からなっていた。講義の部には、算数、理科、簿記、養蚕法、工場管理法及衛生、殺蛹貯繭法、製糸法、製糸機械の科目があり、実習の部には、殺蛹乾繭、工場管理、第一製糸、第二製糸、繭審査、製糸審査、製糸整理、屑繭整理の科目があった。<sup>(25)</sup>

潘英の後、中国人女子留学生は葉若萱、胡寧媛、李哲子、劉其超らが次々に入学し製糸科で勉強した。葉若萱

を除いて他の三人は卒業した。葉若萱は途中退学し、一九〇八年に女子美術学校に入学して刺繍科選科普通科で勉強し、一九一一年に同校を卒業した。<sup>(26)</sup> 東京蚕業講習所に留学した中国人女子留学生五名中四名が卒業したことは明治期の中国人女子留学生を受け入れた学校の中でも珍しいことである。左に東京高等蚕業学校中国人女子留学生名簿を掲げる。

一九一四年三月三十一日、文部省令第九号により東京高等蚕業学校規程が公布され、翌日同規則及び諸規程が発足した。その内に「外国人特別入学細則」があり、内容は次のようである。

第一条 文部省直轄諸学校外国人特別入学規程ニ依リ外国人ニシテ本校ニ於テ教授ヲ受ケントスルモノアルトキハ入学ヲ許可スルコトアルヘシ

第二条 前条ノ志願者ハ本校規則第二十一条ニ定メタル入学願書履歴書ノ外修業学校長ノ証明書竝ニ外務省在外公館又ハ本邦処在ノ外国公館或ハ監督署ノ紹介書ヲ添へ学校長ニ願出ツヘシ

第三条 志願者ノ学力ハ試験ニ依リ之ヲ検定ス

中国人女子留学生を受け入れた官立三校について

第四条 疾病其他止ムヲ得サル事由ニ依リ休学又ハ

退学セントスル者ハ入学出願ノ際紹介ヲ受ケタル官署ヲ経テ出願スヘシ

第五条 在学中成績良好ナル者ニハ修了証書ヲ授与ス

第六条 在学中品行方正成績優秀ニシテ本科本科卒業ト同等ノ学力アリト認ムル者ニハ詮議ノ上特ニ卒業証書ヲ授与スルコトアルヘシ

第七条 本細則ニ定メナキモノハ総テ本校規則ヲ準用ス

#### 附 則

第八条 朝鮮人及台湾人ニシテ特別入学ヲ願出ル者アルトキハ当分ノ内本細則ニ依リ入学ヲ許可スルコトアルヘシ<sup>(27)</sup>

この細則に留学生の入学検定手数料と授業料のことは記されていないが、男・女留学生の授業料などはそれぞれ「本校規則」・「製糸教婦養成科規程」に定められ、それによれば日本人学生の二倍であった。すなわち日本人学生の授業料は一年に本科生及び研究生は二十五圓、選科生は十五圓であるのに対し、留学生の授業料は一年には本科生及び研究生は五十圓、選科生は三十圓であった。



〔表二〕 東京高等蚕糸学校中国人女子留学生名簿（一九〇五年—一九三七年）

| 氏名  | 専攻学科                   | 入学年   | 卒業・退学年 | 一九三八年現在の勤務先・住所   |
|-----|------------------------|-------|--------|------------------|
| 潘英  | 製糸教婦養成科 製糸講習女生本科       | 一九〇五年 | 一九〇七年  | 江蘇省蘇州府吳県         |
| 葉若萱 | 製糸学科 製糸講習科本科           | 一九〇六年 | 退学     | 福建省福州府（出身地）      |
| 胡寧媛 | 製糸学科                   | 一九〇七年 | 一九〇九年  | 広東省瓊州南海県         |
| 李哲子 | 〃                      | 〃     | 〃      | 湖北省漢川県           |
| 劉其超 | 〃                      | 一九〇八年 | 一九一一年  | 湖南省長沙府寧郷県        |
| 張麗霞 | 製糸教婦養成科                | 一九一四年 | 一九一六年  | 江蘇省滌野関省立女子蚕業学校   |
| 趙璠  | 〃                      | 一九一八年 | 一九二〇年  | 山東省益都県           |
| 周代珮 | 〃                      | 〃     | 一九二一年  | 四川省広安県           |
| 陳福璋 | 〃                      | 一九二〇年 | 一九二二年  | 四川省蓬溪県           |
| 張福嫻 | 〃                      | 一九二〇年 | 一九二二年  | 江蘇省無錫永盛絲廠        |
| 費達生 | 〃                      | 一九二一年 | 一九二三年  | 江蘇省無錫玉祈製絲所       |
| 鄭蓉鏡 | （上田蚕糸学校に転学）<br>製糸教婦養成科 | 〃     | 〃      | 〃                |
| 付洪慶 | 製糸教婦養成科                | 一九二二年 | 退学     | 〃                |
| 陳宣昭 | 〃                      | 一九二三年 | 一九二五年  | 浙江省新昌県桂溪村        |
| 吳学謙 | 〃                      | 一九二四年 | 一九二六年  | 南京金陵大学農学院蚕桑系     |
| 羅仲平 | 〃                      | 一九二五年 | 一九二七年  | 安徽省安慶法校街省立女子職業学校 |
| 程熹  | 〃                      | 一九二八年 | 退学     | 〃                |
| 韓惠卿 | 製糸教婦科                  | 一九三三年 | 一九三五年  | 浙江省蕭山県           |
| 周珩珍 | 〃                      | 一九三六年 | 不明     | 〃                |
| 陸卓行 | 〃                      | 〃     | 〃      | 〃                |
| 葛素郷 | 〃                      | 一九三七年 | 〃      | 〃                |

出典：『東京高等蚕糸学校卒業者一覽』各年度版。ただし、一九三八年から一九四一年の資料を欠くため、周珩珍、陸卓行、葛素郷の二名の卒業は確認できない。

女子留学生の場合は、一九一四年に新設された製糸教婦養成科に所属し、男子留学生の授業料より安く一年に三十圓であったが、やはり同科の日本人女子学生の二倍であった。<sup>(28)</sup>

「製糸教婦養成科規程」に「製糸教婦養成科ハ製糸ノ教婦タルヘキ者ニ必要ナル教育ヲ施スヲ以テ目的トス」と定められ、修業年限は二年であった。学科目は東京蚕業講習所時期からいくらか増し、いくらか変わったのである。講義の部では、修身、国語、屑繭整理法及野蚕繭製糸法の三科目がふえ、実習の部では、殺蛹乾繭、工場管理、繭審査の三科目が変わらないものの、その他、機械整理、足踏及座繰製糸、生糸審査、生糸整理、屑繭整理及野蚕繭製糸の科目等が加わった。<sup>(29)</sup>

ところで、中国人留学生の留学生活は、具体的にどういふふうに送られていたのだろうか。また帰国後はどうしたのだろうか。これらの状況について語る文献資料は極めて少ない。そこでそれらを明らかにするために、筆者は『華夏婦女名人詞典』を手掛かりとして、元留日女子学生二十数名中の六名と連絡を取った。その六名の中には東京高等蚕糸学校の一九二三年の卒業生であり、製糸教婦養成科第二十期学生であった費達生（著名な社

中国人女子留学生を受け入れた官立三校について

会学者の費孝通の姉）という人物がおり、筆者は幸い一九九四年の夏にインタビューすることができた。その結果、費達生の留学生活、帰国後の仕事状況、中国の著名な蚕糸専門家になった経緯などと東京高等蚕糸学校の女子留学生のある側面とが明らかになった。

費達生は一九〇三年十月三日に江蘇省呉江県に生まれた。父親費璞安は日本での留学経験があり、辛亥革命に参加し、呉江県の議会の議長に就任したが、その後、江蘇省教育庁の「督学」という職務を持って教育界で活躍した教育者でもあった。費達生は一九二〇年に江蘇省立女子蚕業学校を卒業して来日し、一九二一年に東京高等蚕糸学校に入学した。費達生のことについての詳細は、拙稿「大正時代の中国人女子留学生——費達生」に述べているので、参照されたい。<sup>(30)</sup>

また、費達生の同級生であった井上おとと佐藤ツネという日本人とも連絡が取れ、電話と手紙で費達生のことを尋ねることができたが、費達生はとてもおとなしく真面目な人であり、編み物が上手で友人に教えるなど日本人学生との関係も良好であったという。<sup>(31)</sup>

その後、東京農工大学の澤田孚夫教授の協力を得て、他の製糸教婦養成科の日本人卒業生にインタビューする



写真5 呉学謙の卒業記念写真  
(1926年)

ことができた。

一九二五年の卒業生鈴木巴には同級生陳宣昭のことについて尋ねたが、七十年前のことなので、具体的にあまり覚えていなかったものの、貴重な中国人留学生を含む授業風景などの写真を持っていたので、そこから当時製糸教婦養成科の授業のことなど、いくつかのことが明らかになった。また一九二六年の卒業生詫摩ムツエは同級生呉学謙と親友であり、呉学謙について色々教えてくれた。呉学謙は安徽省に生まれ、一九二四年に東京高等蚕糸学校製糸教婦養成科に入学した。日華学会の「東京在住中華民國留学生名簿」(一九二五年)の記録によると、彼女は官費留学生であった。呉学謙は一九二六年同校を卒業し、一九三七年前後に南京金陵大学農学院蚕桑系に

勤めていた。入学時の呉学謙はほとんどのことが理解できず、きくくらい日本語が上手であった。彼女は二十代であり、既に結婚し、五、六歳の子供がいた。夫も工業高等学校に留学していたようで、家族三人は一緒に小石川の中国人留学生の寄宿舎に住んでいた。詫摩ムツエともう一人の同級生は誘われて、一緒に呉学謙の家に行って馳走に与ったこともあったという。<sup>(32)</sup>

当時、東京高等蚕糸学校には「学生生徒制服」という規程があり、学生の制服の様式、生地、色などをすべて定めていた。女子学生も例外ではなく、派手な服装は禁じられていた。ただし、留学生はそれを厳しく要求されていないかった。製糸教婦養成科の見学写真と卒業写真に、中国の服装を着ている留学生の姿が写されている。実習の時の写真にも、日本人の学生と中国人留学生の実習服はみな白色であり、様式も似ているが、襟を見ると、日本式と中国式の違いが一目瞭然である。<sup>(33)</sup> 詫摩ムツエの話によると、実習服は生地、様式、色などは学校で決めていたが、作るのは生徒たちの仕事であった。呉学謙の特別な実習服は日本の裁縫ができない中国人留学生の手作りではなかったであろうか。

留学生にとって東京高等蚕糸学校の入学はかなり難し

かつた。外務省の記録に一九二六年五月五日付き「学費支給支那留学生在学学校（東京市内及近郊）歴訪報告」なるものがあり、その中に次のような記事がある。

東京高等蚕糸学校ノ如ク希望者多数アルニ係ラス  
一名ノ入学者モ無キ状態ニテハ将来支那ニ於ケル蚕  
糸農業ノ發展上關係スル処少シトセサルニ付 農科  
即高等農林、高等蚕糸等ノ学校ニ共通本科ニ入学セ  
シメ得ル特設予科ノ設置方ノ考慮アリ度キ旨 本多  
東京高等蚕糸学校校長ノ希望アリタリ<sup>(34)</sup>

当時東京高等蚕糸学校に入学を望んだ中国人がかなり多かつたにもかかわらず合格者が一人もいないという状態は、試験が厳しかったことを物語っている。費達生の話では、試験でも授業でも留学生の特別コースはなく、全部日本人の学生と一緒にであった。東京高等蚕糸学校に入学するため、日本語が早くできるように家庭教師を頼んだり、中国人が多い旅館から日本人の下宿へ引っ越し<sup>(35)</sup>たりして、日本語を一生懸命に勉強した、という。

東京高等蚕糸学校だけではなく、日本人学生と同様試験を受けなければ入学できない学校は、上記の外務省記録の中でいくつか取り上げられている。

一般二本邦学生ト同様選抜試験合格者ニアラサレハ

中国人女子留学生を受け入れた官立三校について

入学セシメサル学校ノ増加シタルコトニシテ 東京  
高等蚕糸学校始メ 特ニ女子ノ学校ニ於テハ東京女  
子高等師範学校、日本女子大学校及東京女子医学専  
門学校ニシテ 何レモ希望者数名アルニ係ラス 本  
年ハ一名モ入学ヲ許可セラレサリシ状態ナリ  
つまり、このことは大正末期の一九二六年において東  
京高等蚕糸学校をはじめとする右の四校には一人の中国  
人留学生も入学できなかったことを示している。

日本で勉強している留学生にとって専攻を勉強する前  
に乗り越えなければならぬことは日本語であった。奈  
良と違い東京は日本語予備校もいくつかあり、留学生た  
ちに便宜を提供していたが、それらの学校は専門的な教  
科を教えるものではなかった。そのため奈良女高師のよ  
うに特設予科を設置する学校もあった。例えば、東京女  
子医学専門学校は、日本語及物理、化学等について留学  
生に特別に学習させる特設予科を開設していた。<sup>(36)</sup>

ところで、東京高等蚕糸学校の製糸教婦養成科は先の  
外部省の記録の中で「製糸教婦養成科（東京高等蚕糸学  
校）ニ入学支那女学生招致ニ関スル件」として次のよう  
に特別に取り上げられている。

将来支那ニ於テ製糸業ヲ助長セシムル為製糸教婦ヲ

養成スルコト緊要ナルニ付同校ニ対テモ特ニ注意ス  
ヘシ

だが、東京高等蚕糸学校の中国人女子留学生の名簿を見れば分かるように、昭和期に入っても女子留学生はふえなかった。

東京高等蚕糸学校の製糸教婦養成科の入学資格・修業年限・授業料などは、製糸科・養蚕科とかなり異なっていた。入学年齢は製糸科・養蚕科が満十七歳であり、製糸教婦養成科が満十八歳であった。資格は製糸科・養蚕科が中学卒業で、製糸教婦養成科は一年以上製糸に従事した者及び高等小学校卒業者などであった。修業年限は、製糸科・養蚕科が三年であり、製糸教婦養成科が二年であった。費達生の話では、男子の製糸科は理論的な学習が主で、実際の作業の習得は補助的であり、製糸教婦養成科の学習の主眼は、製糸の全工程の実際的な作業の習得であり、理論的なものは補助的であった。<sup>37)</sup>

東京高等蚕糸学校の中国人女子留学生は、同時代の中国人女子留学生を受け入れる学校のそれと比べて数としては多くなかったが、卒業率はかなり高かった。一九〇五年から一九三七年までに入学した中国人女子留学生は二十一名であり、そのうち十五名が卒業し（一人は上田

蚕糸専門学校に転校、同校を卒業）、退学したのは三人だけであった。残りの三名、すなわち周璿珍、陸卓行、葛素郷については資料を欠くため確認はできないが、うち周璿珍、陸卓行が二年生になったということを考えると、卒業した可能性が高い。官立三学校の中国人女子留学生卒業者名簿を以下に掲げる。

この名簿を見ると、東京高等蚕糸学校卒業生は三校の中で一番少ないが、前述の如く、その卒業率が高かった。東京女高師は一九三七年までに合計六十二名の中国人女子留学生中三十九名が卒業しており、奈良女高師の場合には三十八名中二十三名が卒業している。つまり、二校とも卒業率は六割を少し超えるくらいであった。他方、東京高等蚕糸学校の場合は、実習の時間が多く、重労働とも言える授業もあるにもかかわらず、多数の女子留学生が卒業した。東京高等蚕糸学校の中国人女子留学生の卒業率は少なくとも七割を超え、この中では最高を示している。

これに東京高等蚕糸学校製糸教婦養成科の学制は二年であったこと、入学試験の厳しいこと、さらには官費留学生在が多いこと等も関係しているようだが、東京高等蚕糸学校の希望者は明確な目的を持つ学生が多かった点が

〔表三〕 中国人女子留学生受け入れ官立三校卒業者統計表（一九〇七年～一九三七年）

（単位：人）

| 卒業年度      | 学校・学科 |    |     |     | 東京高等蚕糸学校<br>製糸教婦養成科等 |    |     | 合計 |
|-----------|-------|----|-----|-----|----------------------|----|-----|----|
|           | 理科    | 文科 | 家事科 | その他 | 理科                   | 文科 | 家事科 |    |
| 一九〇七      |       |    |     |     |                      |    |     | 一  |
| 一九〇八      |       |    |     |     |                      |    |     | 二  |
| 一九〇九      |       |    |     | 一   |                      |    |     | 一  |
| 一九一〇      |       |    |     |     |                      |    |     | 二  |
| 一九一一      |       |    |     |     |                      |    |     | 一  |
| 一九一二（大正一） |       |    |     |     |                      |    |     | 一  |
| 一九一三      | 二     |    |     |     |                      |    |     | 二  |
| 一九一四      |       |    |     |     |                      |    |     | 一  |
| 一九一五      |       |    |     |     |                      |    |     | 一  |
| 一九一六      | 二     |    |     |     |                      |    |     | 二  |
| 一九一七      |       | 一  |     |     |                      |    |     | 一  |
| 一九一八      | 二     |    |     |     |                      |    |     | 二  |
| 一九一九      | 二     |    |     |     |                      |    |     | 二  |
| 一九二〇      |       |    |     |     |                      |    |     | 一  |
| 一九二一      |       |    |     |     |                      |    |     | 二  |
| 一九二二      |       |    |     |     |                      |    |     | 一  |
| 一九二三      |       |    |     |     |                      |    |     | 二  |
| 一九二四      | 一     |    |     |     |                      |    |     | 一  |
| 一九二五      |       |    | 二   |     |                      |    |     | 二  |
| 一九二六（昭和一） |       | 一  | 二   |     |                      |    |     | 三  |
| 一九二七      |       |    | 二   |     |                      |    |     | 二  |
| 一九二八      |       |    | 二   |     |                      |    |     | 二  |

中国人女子留学生を受け入れた官立三校について

|     |    |  |      |  |  |  |  |  |
|-----|----|--|------|--|--|--|--|--|
|     |    |  | 一九二九 |  |  |  |  |  |
|     |    |  | 一九三〇 |  |  |  |  |  |
|     |    |  | 一九三一 |  |  |  |  |  |
|     |    |  | 一九三二 |  |  |  |  |  |
|     |    |  | 一九三三 |  |  |  |  |  |
|     |    |  | 一九三四 |  |  |  |  |  |
|     |    |  | 一九三五 |  |  |  |  |  |
|     |    |  | 一九三六 |  |  |  |  |  |
|     |    |  | 一九三七 |  |  |  |  |  |
| 合計  | 一七 |  |      |  |  |  |  |  |
|     | 七  |  |      |  |  |  |  |  |
|     | 一一 |  |      |  |  |  |  |  |
| 三九  | 四  |  |      |  |  |  |  |  |
|     | 七  |  |      |  |  |  |  |  |
|     | 一一 |  |      |  |  |  |  |  |
| 一三三 | 三  |  |      |  |  |  |  |  |
|     | 一四 |  |      |  |  |  |  |  |
|     | 七六 |  |      |  |  |  |  |  |

〔注〕：東京女高師については、加藤直子「調査研究 東京女子高等師範学校と中国人女子留学生」『お茶の水女子大学女性文化資料館報』六、一九八五年、奈良女高師については、「中国人留學生の卒業者名簿」、「中国人留學生の退學者名簿」、および錢青「奈良の憶い出」(『奈良女子大学八十年史』一九八九年、所収)、東京高等蚕糸学校については、『東京高等蚕糸学校卒業者一覽』各年度版、のそれぞれ記載に基いて作成した。

一番の理由ではなかったかと思われる。この学校の希望者は留学前に蚕糸に関係がある者が多く、中国ですでに蚕糸に関する教育を受けた学生もいたためである。

製糸教婦養成科第十九期の張爛は、中国の「絲綢の郷」と呼ばれる蘇州から来日し、江蘇省立女子蚕業学校を卒業生であった。<sup>(38)</sup> 製糸教婦養成科第二十期の費達生と鄭蓉鏡も江蘇省立女子蚕業学校の卒業生でもあった。二

人は東京高等蚕糸学校に合格してから、江蘇省の官費留學生になった。費達生は製糸、鄭蓉鏡は養蚕を勉強するためであった。入学後、鄭蓉鏡は上田蚕糸専門学校に転校し、二年後に卒業した。費達生は製糸教婦養成科を卒業した。三人とも卒業後母校の江蘇省立女子蚕業学校に戻り、教鞭をとりながら養蚕基地、蚕糸会社などの蚕糸業各領域で活躍した。



写真6 生糸で編み物をする費達生（1994年8月14日筆者撮影）

韓惠卿は一九〇七年に浙江省蕭山で生まれ、一九二四年に浙江省立女子蚕業講習所を卒業した。浙江省の官費留学生として、一九三一年に東京高等蚕糸学校に入学し、一九三三年に同校を卒業した。卒業後、横浜で一年間実習した。一九三四年に帰国し、中華合衆蚕桑改良会鎮江女子蚕業学校で教鞭をとりながら、重慶蚕糸公司の技師として働いた。一九四〇年から一九四三年まで雲南省楚雄高級蚕業講習所の教師となり主任でもあった。一九四三年から一九五三年まで雲南大学農学院系主任で勤め、中山大学の製糸学講義をも担当した。一九五三年以後、西南農科大学教授となり、西南蚕糸公司の顧問にもなった。かつて重慶蚕桑学会理事長、四川省蚕糸学会理事・顧問、第三回全国人民代表大会の代表、第三回全国婦女代表、第五・六回全国政協委員になったことがある。系統的な教科書『蚕糸学』を編著し、「四川省財洪の蚕糸生産の調査」等の論文を発表した。<sup>(39)</sup>

### おわりに

東京女高師、奈良女高師、東京高等蚕糸学校は同じ官立学校として文部省の直轄にあり、「文部省直轄学校外国人特別入学規程」に従って各自の留学生についての細



則を規定していたにもかかわらず、具体的な対策は上記のようにそれぞれ異っていたが、なおも一つの共通点が目立って見られる。それは中国人留学生に対してほとんど日本人と変わらなく本格的な教育に行つたことである。このことは留学生たちの留学体験に大きな影響を与えたのであり、その延長線は帰国後の留学生の一生にはつきりと刻印されている。この三校の卒業生たちは優秀な人材が多く、帰国して各界の中堅となつて活躍したのである。

また、偶然とはいえ、大正期には、上述の官立三校以外に、比較的集中して中国人女子留学生を受け入れた私立三校もあった。それは東京女子医学専門学校、女子美術専門学校、日本女子大学校であつた。これら私立三校は中国人女子留学生の受け入れに関して本稿で扱つた官立三校とどのような点で共通し、どのような点で相違したのであるか。この点については今後の研究課題にし、別稿において検討したいと思う。

註

- (1) 『大清法律大全』卷十七、教育部、游学生、九頁。
- (2) 加藤直子「調査研究 東京女子高等師範学校と中国人女子留学生」『お茶の水女子大学女性文化資料館報』六、

一九八五年、六十三―九十一頁。

- (3) 中塚明「奈良女子高等師範学校の中国人・朝鮮人留学生」『アジア女性交流史研究』九、一九七一年、十八―二十頁。

- (4) 「文部省直轄学校外国人特別入学規程」(明治三十四年十一月 文部省令第十五號) は次の通りである。

- 第一條 外國人ニシテ文部省直轄學校ニ於テ一般學則ノ規定ニ依ラス所定ノ學科ノ一科若ハ數科ノ教授ヲ受ケントスル者ハ外務省、在外公館又ハ本邦所在外國公館ノ紹介アルモノニ限り特ニ之ヲ許可スルコトアルヘシ
- 第二條 前條ニ依リ教授ヲ受ケントスル外國人ハ前條ノ紹介書ヲ添ヘ帝國大學總長若ハ學校長ニ願出ツヘシ
- 第三條 帝國大學總長若ハ學校長ニ於テ前條ノ出願ヲ受ケタルトキハ相當ノ學力アリト認メタル者ニ限り之ヲ許可スヘシ但シ學校ノ設備上差支アル場合ハ此ノ限ニアラス
- 第四條 本令ノ規定ニ依リ入學シタル外國人ニシテ學科修了ノ證明書ヲ受ケントスル者ニ試験ノ上之ヲ附與スヘシ
- 第五條 本令ノ規定ニ依リ入學シタル外國人ニハ入學試験料入學料及授業料ヲ徴収セサルコトヲ得
- 第六條 帝國大學總長及學校長ハ文部大臣ノ許可ヲ承ケ本令ニ關シ必要ナル細則ヲ設クルコトヲ得

附則

第七條 本令施行ノ際文部省直轄學校ニ於テ一般學則

ノ規定ニ依ラス在學スル外國人ハ本令ニ依リ入學シタル者ト看做ス

第八條 明治三十三年文部省令第十一號文部省直轄學

校外國委託生ニ關スル規程ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

(5) 『東京女子高等師範學校沿革大要 其二』(一九一三年)。

(6) 『東京女子高等師範學校一覽』明治四十二年度(一)、百十一頁。

(7) 張徳安「陶慰孫伝記」『陶慰孫百年誕辰記念文集』長春、吉林大學出版社、一九九六年、所収、参照。

(8) これは、東京女高師の各年度の「一覽」に明確に記録されている。

(9) 『東京女子高等師範學校一覽』一九二九年(昭和四年)〜一九三〇年(昭和五年)、八十頁。

(10) 一九九四年八月九日の董錫蕙とのインタビュー記録。

(11) 一九九六年六月十五日付、陶虞孫が口述し、娘陶蕙が筆記した筆者への手紙。

(12) 加藤前掲論文、六十八頁。

(13) 『奈良女子大學六十年史』一九七〇年、七十頁。

(14) 奈良女子大學附屬圖書館所藏校史關係史料十九「特設予科・外國人特別入學」14「外國人留學生ニ關スル官庁往復書類」。

(15) 外務省記録「官公立大學專門學校 支那留學生現狀調」(大正十三年五月現在) 文部省普通學務局。

中國人女子留學生を受け入れた官立三校について

(16) 前掲「特設予科・外國人特別入學」7「特設予科規程」。

(17) 一九九六年十月一日付錢青の手紙。

(18) 同上。

(19) 前掲「特設予科・外國人特別入學」補3「特設予科修學旅行に關する書類」は、一九二五年から一九三四年までの修學旅行の様子を伝えている。

(20) 『奈良女子大學八十年史』一九八九年、三〇四〜三〇五頁。

(21) 一九九六年十月一日付錢青の手紙。

(22) 『東京高等蚕糸學校五十年史』東京高等蚕糸學校、一九四二年、七十三頁。

(23) 『東京農工大學百年の歩み』東京農工大學創立記念事業會、一九八二年、一〇五頁。

(24) 前掲『東京高等蚕糸學校五十年史』七十九頁。

(25) 前掲『東京高等蚕糸學校五十年史』九十八〜九十九頁。

(26) 女子美術專門學校『学籍簿』による。

(27) 前掲『東京高等蚕糸學校五十年史』一九一頁。

(28) 前掲『東京高等蚕糸學校五十年史』一七三頁及び一七九頁。

(29) 前掲『東京高等蚕糸學校五十年史』一七七〜一七八頁。

(30) 拙稿「大正時代の中國人女子留學生―費達生」『お茶の水女子大學女性文化研究センター年報』九・十合併号、一九九六年。

(31) 一九九五年十二月二十四日の井上おとの電話記録と同日の佐藤ツネの手紙。

- (32) 一九九五年十二月二十四日の訛摩ムツエとのインタビューの記録による。
- (33) 訛摩ムツエ所有東京高等蚕糸学校「卒業記念」(アルバム)一九二六年三月。
- (34) 外務省記録「在本邦留学生関係雑件」第一卷。
- (35) 前掲「大正時代の中国人女子留学生―費達生」。
- (36) 外務省記録「在本邦留学生関係雑件」第一卷。
- (37) 前掲「大正時代の中国人女子留学生―費達生」。
- (38) 『近代中国蚕絲業的先駆―鄭辟疆』蘇州蚕桑専科学校、蘇州蚕桑専科学校校友会、一九九二年、二十四頁。
- (39) 華夏婦女名人詞典編委会編『華夏婦女名人詞典』北京、華夏出版社、一九八八年、一〇二〇頁。